



見学の皆様へ

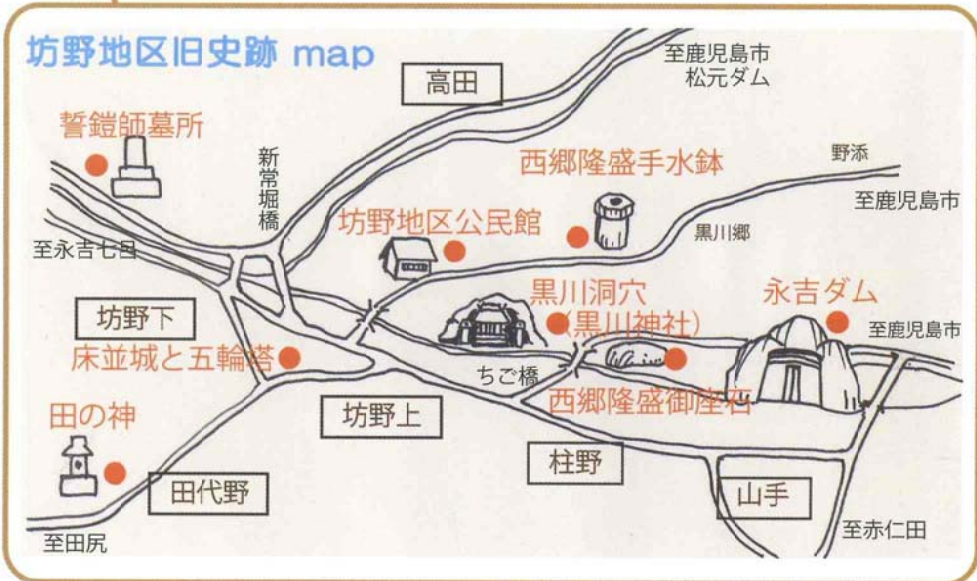
本日は黒川洞穴へのご見学有難うございます。

黒川洞穴の発掘調査状況や、黒川神社の歴史の資料を用意いたしました。どうぞ、お目通しください。

### Access map



最寄りのIC・ほか	キ。数	車(分)
鹿児島IC	18	30
谷山IC	11	16
伊集院IC	15	20
伊作(中原交差点)	10	14
伊集院駅	13	18

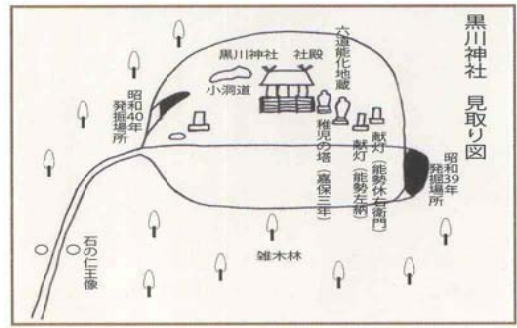


## 黒川洞穴・黒川神社入口の仁王像

神社入口の左右に、享保九(一七二四)年に建てられた二基の石製仁王像があります。

仁王像は、伽藍守護の神で寺門の両脇に安置した一對の半裸形の金剛力士です。

口を開けた仁王(阿形)と閉じた仁王(吽形)があり、勇猛、威嚇の相をとっています。



縄文時代前期から弥生時代に至る数千年の住居跡

## 黒川洞穴

地区民にとって「黒川洞穴」は、何物にもかえがたい宝です。黒川洞穴には、七千年前の縄文時代前期から二千年前の弥生時代まで、数千年の間人が住んでいました。土器や石器だけでなく、骨や貝殻などの遺物を含む地層が、良好に存在する貴重な遺跡です。

### 遺跡の地形

黒川洞穴は、薩摩半島のほぼ中央に位置し、標高八十四メートルのところにあります。永吉川(二俣川)の上流柱野川の流れによってできた細長い谷の南を向いた斜面に洞穴があります。吹上浜から東約五キロの地点にあり、狭い山田が柱野川に沿ってあるだけの地帯です。洞穴は山腹にありその土質はやや凝結した火山灰(シラス)です。

県道田ノ頭吹上線沿いにある駐車場から、黒川

神社の赤い鳥居をくぐり細い道を下り、永吉川（二俣川）を渡り、坂を上ったところの崖の中腹に大きな横穴がパツクリと開いた所が黒川洞穴です。

木々の緑は深く、辺りは数千年の昔、縄文時代のままの雰囲気を漂わせています。洞穴の中に入ると、ヒンヤリと涼しく、体中の汗が引いていくのが分かるほどです。竪穴住居が縄文時代の二戸建てなら、黒川洞穴は、「テラス付きマンション」と言ったところでしょうか。

洞穴は、東西に並んで二カ所あります。

東側の洞穴は、入口の幅十一メートル、高さ四・三五メートル、奥行き八・四メートルです。穴は東西を向いて、内部は土塊の崩落がなく平坦です。

西側の洞穴は、入口の幅約十三・三メートル、高さ約六メートル、奥行きは、岩塊崩落のため、極めることはできないが相当に深く、入口は南向きで、東北を向いています。

この洞穴は、鹿児島市の谷山方面に繋がっているという説もあるようです。

## 発掘調査の経過

黒川洞穴は、これまでに四回（昭和二十七～四十年）の発掘調査が行われてきています。

発掘を始める発端は、昭和二十七（一九五二）年頃坊野小学校の辻正徳教諭が学校に保管されていた土器の破片、貝殻、獣骨等を、県文化財専門委員の河口貞徳氏に見てもらったところ縄文土器の破片等であることが分かったことでした。

第二次調査（昭和三十九年）では、三千年ほど前の二十五歳から三十歳ぐらいと推定される女性の人骨の他、土器・石器・骨角器・貝類・動物の骨等が出土しました。当時の埋葬法を裏付ける人骨の発見もさることながら、土器は、他に類似の形態が無く、「黒川式土器（縄文晩期三〇〇〇年前）」と名付けられました。出土品の一部は、坊野地区公民館に展示してあります。

また、自然遺物の中に、ニホンオオカミ・ツキノワグマが出土しており、絶滅したニホンオオカミが、縄文時代には鹿児島に生存し、坊野付近にいたと

## 坊野と黒川神社

黒川神社（黒川・能勢権現社）は、『三国名勝図絵』で「永吉村黒川という所にある。祭神はつまびらかではないが、例祭は正月八日で、昔、当邑坊野門の農夫が肥後の国よりやってきて、初めて当社の傍らにある石洞の中に安置した。洞内の大石が崩れ落ちたので卯（東）の方一町（六十間、約一〇九メートル）程離れた大岩窟に遷座（移す）した。その後、このところに奉祀したという。

社内に、文明三（一四七一）年二月十六日造立の棟札を納める。大檀那藤原忠俊（※1）、大宮司能勢彦左衛門とするしてある。この時、社殿をここに建てたらしく、世間では、これを能勢権現ともいう。これを守ってきた子孫が、今の坊野門の農夫で能勢を名乗り、代々宮司である（※2）」と記されています。また、『永吉神社考』では、「黒川神社・氏子社・スサノウの尊・以上一柱植民の神・字柱野に鎮座・坊野門・黒川門の氏神なりとい



鹿児島県内で出土した黒川式土器

鹿児島県立埋蔵文化センター蔵

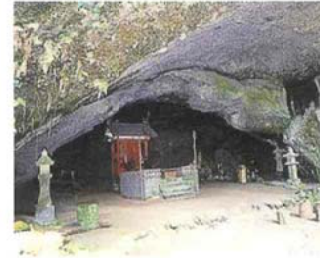
いうことが判明しました。石器の他に、貝製のプレズレットや骨製のヘアピンなども出土しています。黒川洞穴は、平成十六（二〇〇四）年四月、鹿児島県の文化財に指定されました。

# 黒川洞穴・黒川神社 年表

時代・西暦	年号	事項	鹿児島県内遺跡	気候状況
旧石器時代	約3万1千年前	黒川洞穴出現	横峰遺跡(南種子町)	阿多カルデラ
	約2万8千年前		立切遺跡(中種子町) 上場遺跡(出水市) 帖地遺跡(鹿児島市)	給良カルデラ噴火 入戸火砕流
縄文時代	15,000~12,800年前	黒川洞穴内の住人(未調査)	掃除山遺跡(鹿児島市) 椿ノ原遺跡・志風頭遺跡(南さつま市)	最終水期終わる
	~7,300年前		上野原遺跡(霧島市) 加栗山遺跡(鹿児島市)	1万2000年~1万年前急速に気温上昇 日本列島分離 サツマ火山灰 桜島誕生(給良カルデラ)
	~5,000年前	縄式土器 曾畑式土器	阿多貝塚(南さつま市)	鬼界カルデラ アカホヤ火山灰 高温期
	~4,300年前	春日式土器 阿高式土器	出水貝塚(出水市) 終原貝塚(垂水市) 市来貝塚(いちき串木野市)	池田カルデラ +2℃最高期縄文海進 期海面+5m
	~3,200年前	指宿式土器 市来式土器	橋牟礼川遺跡(指宿市)	3500年前 サントリーニ火山の大爆発 開閉岳誕生
	~2,800年前	黒川式土器	宇宿貝塚(奄美町)	3000~2500年前急速に下降
弥生時代 A.D.0000年	~1,700年前	ドルメン(坊野下大久保)	山之口遺跡(錦江町)	2500~3000年前急速に上昇
1096	平安 嘉保3年	『稚児の塔』		
1383	南北朝 正平18年	播磨の国地黄城主能勢頼口 赤松氏範に呼応し挙兵するも敗れ薩摩の国に落ち延びる		
1471	室町・戦国 応仁の乱 文明3年	黒川神社造立 この頃 坊野は藤原忠俊の勢力圏に属する		
1533	島津貴久 南郷城を攻める際 能勢清弥が坊野衆15人を引き連れ、獵人に扮し、城内に攻め入る			
1675	延宝3年	黒川神社「六道能化地藏」建立		
1724	享保9年	黒川神社「仁王像」建立		
1744	延享元年	黒川神社「燈籠」建立		
1795	寛政7年	黒川神社再興 棟札の写しあり		
1869	明治 明治2年	廃仏毀釈 仁王像破壊痕あり		
1936・1942	昭和11・17年	黒川神社失火(神体及び2体唐猫)焼失		
1952	昭和27年	辻正徳氏(坊野小学校教諭)黒川洞穴の縄文土器を発見		
1953	昭和28年	河口貞徳氏(県文化財専門委員)黒川洞穴(東側)発掘		
1964	昭和39年	日本考古学協会調査団11名黒川洞穴を発掘 人骨・黒川式土器など出土		
1942	昭和41年	黒川神社社殿を再建し、現在に至る		

## 「稚児の塔」

黒川神社の社殿に向かって右側に「稚児の塔」が



※1 伊集院島津家忠俊  
※2 彦左衛門には、五人の嫡子があり、第一子が鹿児島島城下土となり、第二子が能勢姓(黒川神社宮司)、第三子・第四子はそれぞれ坊野姓、黒川姓を名乗り、現在に至ります

う」と記されています。残念ながら、昭和十一年の秋、失火により祭道具・古文書など貴重な文化財が焼失しました。しかし、昭和十三年に再建され、落成遷座祭が執り行われました。その後、戦時中にも焼失しましたが、昭和四十一年再建されています。

あります。『三国名勝図絵』には、

「この岩窟当社の傍らにあり、当初当社の神を崇めし所という。窟中に古塔があつて、嘉保三(一〇九六)年「一乗妙典讀誦僧覺尊」としてある。これを『稚児の塔』という。また、社前に流水があつて、柱野川と呼ぶ。稚児が淵と唱える。俗伝に、昔この辺りに寺があつて、寺で遊んでいた子どもが、この淵に落ちて沈んだので、住僧がその菩提のために建立した塔であると云う」と記されています。

吹上郷土史では「嘉保三年に造立した供養塔が現存していれば、鹿児島において最も古い供養塔であるといので、築地健吉県文化財保護審議会委員が調査されたが、崩れ落ちた岩石の下に埋没したのか発見されなかつた」とあります。

地区では、社殿の右側に安置されている塔(像)が「稚児の塔」であると信じられています。銘も「一乗妙典讀誦僧覺尊」嘉保三年と判読できると言われています。